町史とっておきの話 233

町民が生んだ只見の宝「民具」③

民具収集のはじまり（その2）

只見町文化財調査委員
飯塚　恒夫

▲ 明治百年記念事業での民具展示（昭和43年旧只見公民館）

民具収集のはじめのころは、各公民館が独自の方法で行っていました。公民館部長の協力はもちろん、民芸品保存会の老人グループの応援も得ながら、各集落の情報の提供、現地案内、収集作業などに携わってもらったのです。このような活動をする中から、民具に関心を持つ町民が徐々に増え、情報や民具そのものが町民の方々から提供されるようになりました。

ところが、収集場所の旧電発診療所が解体されることになり、移転場所を探さなければならないことになったのです。それは昭和四十五年前後だったと思います。三地区の公民館で収集した民具は、それぞれの公民館が確保した施設に移転させましたが、その後も転々と引っ越しを繰り返すことになります。（下表参照）。

収集時には、一点ごとに名称と寄贈者名をつけて保管していたのですが、移動するたびに本体が痛んだり、名札がなくなったりと取扱いの苦労は、たいへんなものでした。

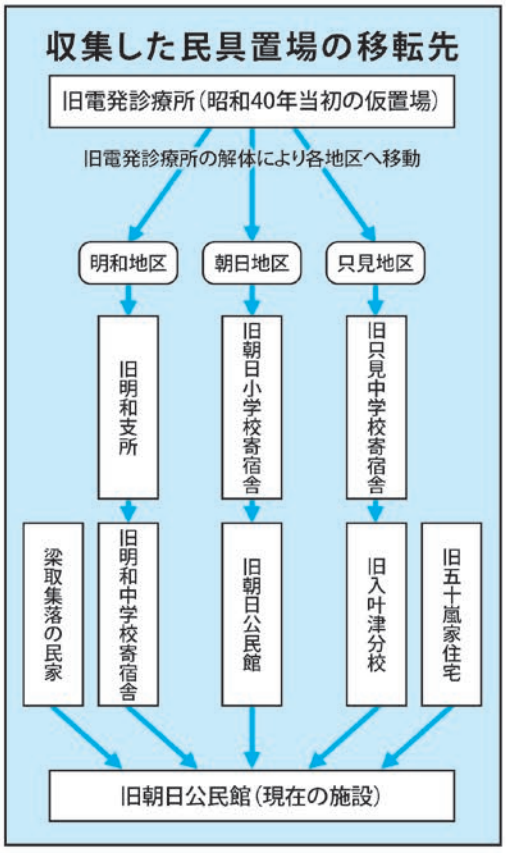
ここで、民具収集の第一期（昭和四十年～六十年代）の主な動向をたどっておきたいと思います。

昭和四十三年の明治百年記念祭に郷土資料展を開き、収集した民具を展示するとともに、『図説只見の歴史』に収録しています。翌四十四年八月十二日の集中豪雨によって、四つの集落が移転するのを機に緊急民俗調査を実施し、同時に民具収集も行っています。また、四十五年、猪苗代町に会津民俗館が、四十七年には田島町に奥会津地方歴史民俗資料館が開館するなど、民具に対する人々の関心は年々高まっていました。

その当時、ある民間業者が集落に特定の収集者を依頼し、有料で民具を集め、町外に持ち出すということがたびたびありました。無償で提供してもらう収集方法に危機感をもった公民館は、特定の民具を一時借用して流出を防いだこともあったのです。

町では、四十七年に「只見山村民俗センター構想」を企画し、叶津地区を予定地として、その一帯に五十嵐家住宅を移築復元し、叶津番所を保存するとともに、民俗資料館を整備する方針でしたが、幻の計画に終わりました。

昭和五十二年、明和公民館では、民具を明和中学校寄宿舎に移転した折、一階を展示室、二階を収蔵庫として整備しました。展示整理には、老人有志があたり、明和中学校ＰＴＡでは卒業記念事業として民具の収集に協力しています。学校ではそれを契機に学習に活用されてきました。

昭和五十八年には、南郷農業改良普及所の指導で、明和地区の高齢者対策として明和文化クラブが結成され、三か年にわたり民具の活用を含む民俗調査に取り組みました。その成果は、『むらの思い出』にまとめられ、同六十二年、明和の民俗を語る会として発展させ、民具の収集活動と一部整理も行っています。

このようにして二十年余にわたって収集されてきた民具は、旧寄宿舎など町内数か所の仮置場に未整理のまま保管されてきました。この民具が本格的に整理され活用されるには、平成元年の町史編さん事業の着手を待つことになるのです。